

ZOCALO 2026 10・12

ZOCALO＝ソカロは
メキシコの都市の広
場を意味するスペイ
ン語。埼玉県立近代
美術館はアートを通
じて交流する市民の
広場をめざしています。

企画展

内間安理・俊子展 色を織り、記憶を紡ぐ

2026年10月10日(土)～2027年1月17日(日)

鮮やかな色彩と繊細な色調の変化が印象的な瑞々しい木版画。
遠い記憶を呼び起こす懐かしさと親密さが詰め込まれた詩的な
コラージュ。これらの作者である内間安理(1921-2000)と内間俊子
(1918-2000)は、戦後に東京とニューヨークで作家として活躍すると
同時に、日米の作家たちをつなぐ架け橋となる重要な役割を担う
存在でもありました。

企画展「内間安理・俊子展 色を織り、記憶を紡ぐ」は、作家夫婦
である二人の独自の歩みを辿る展覧会です。

内間安理《Forest Byobu (Bathers-Autumn)》(部分)
1982年 多色木版、紙 個人蔵

内間俊子(1907のポストカード)(部分)
1982年 コラージュ、パステル、紙 個人蔵

色を織る―木版画を探究し続けた内間安理

内間安理は、沖縄からアメリカへ移住した両親の元に生まれた日系二世の作家です。1940年来日すると、翌年4月から早稲田大学専門部建築科に入学。しかし、元々絵画に関心を抱いていた安理は、在学中から熊岡洋画研究所で油彩画を学ぶようになります。終戦後も日本にとどまり、読売アンデパンダン展などに出品を重ねるなか、1954年、とある出来事が安理に転機をもたらします。進駐軍で現代版画コレクターであったオリヴァー・スタットラーによる日本人版画家へのインタビューに、通訳として同行することとなったのです。その取材の過程で棟方志功や恩地孝四郎といった重要な版画家たちと知り合い、彼らの木版技術を直接目の当たりにした安理は、木版画での表現へと飛び込んでいきました。

安理の木版画は、時代ごとに変化を見せていきます。探究を開始した1950年代中頃には、恩地からの影響か、様々な素材を版として用いるマルチブロックの技法での表現が試みられていますが(図1)、1957年頃には、棟方を思わせる太く黒い線による画面構成が登場します。妻・俊子とともに帰米する1959年頃からは、墨絵や浮世絵のぼかし技法を取り入れた、繊細な彫りによる空気を含んだような独自の版表現へと移行していきました。本格的な木版画制作を始めた頃から『芸術新潮』の新進作家特集で取り上げられたり、1956年にはシュル美術賞展で3等を受賞したりと一定の評価を得ていた安理は、1970年、ヴェネチア・ビエンナーレに《Misty Morn》(図2)などを出品し、国際的な評価を確立させました。

そして、同年のグッゲンハイム・フェローシップ受賞を機に実現した約5ヶ月にわたるヨーロッパ、アジア、南米での研究旅行や、数年に及ぶ西洋美術の再研究を経た安理は、光と色彩がゆらめく《Forest Byobu 森の屏風》(表紙左)の世界へと辿り着きます。「色面織り」と呼ぶ独自の木版画技法を用い、季節、気候の変化によって移ろう自然の様子や光の動きを色面モザイクで見事に表わしたこのシリーズは、木版画家としてのひとつの到達点となりました。しかし、「色面織り」の表現をさらに深化させ、次の展開が見えてきた矢先の1982年、安理は脳卒中で倒れ、以降制作を再開することは叶いませんでした。



図1 | 内間安理《小さなアパート》1955年
(摺り: 1956年) 多色木版、マルチブロック、紙
個人蔵



図2 | 内間安理《Misty Morn》1964年
多色木版、紙 個人蔵



図3 | 内間俊子《影のある風景》1954年
油彩、カンヴァス 和歌山県立近代美術館蔵



図4 | 内間俊子《His Baren》1989年
ミクストメディア 個人蔵

安理については2014年の沖縄県立博物館・美術館での展覧会以来、約12年ぶりとなる回顧展開催、俊子については初期から晩年までの活動を紹介する初めての機会となります。また、恩地や棟方に加え、イサム・ノグチや長谷川三郎、泉茂、瑛九など二人と深い交流のあった人物の作品も取り上げ、日米のアーティストや文化人のネットワーク形成に尽力した夫妻の姿にも焦点を当てています。二人が築き上げた唯一無二の豊かな芸術世界を、展示室でぜひお楽しみください。(S.A.)

モネの見た景色

没後100年の展覧会を訪ねて

当館の収蔵品の中でもひととき人気の高い、クロード・モネによる《ジヴェルニーの積みわら、夕日》以下、《積みわら》。2026年は、1926年にモネが没してから100年目にあたり、各地で記念の展覧会が開かれています。当館の《積みわら》も、モネが晩年を過ごしたジヴェルニーの美術館から展覧会へ出品依頼があり、はるばる里帰りを果たしました。[2026年3月27日～7月5日「睡蓮」が誕生するまで モネとジヴェルニーの出会い (Avant les nymphéas. Monet découvre Giverny, 1883-1890) ジヴェルニー印象派美術館 (Musée des impressionnismes Giverny)] ※《積みわら》の展示は5月26日まで

ジヴェルニーはどういった土地で、モネはどのようなまなざしを投げかけていたのでしょうか。返却時の作品引き取りにあたり、ジヴェルニーを旅した篠原学芸員に話を聞いてみました。

ジヴェルニーは、どんな雰囲気土地でしたか？

パリの北西約70km、セーヌ川沿いの小さな町です。モネの終の棲家と、モネと家族の墓がある聖ラドゴンド教会、ジヴェルニー印象派美術館などがある長閑な土地でした。最寄りのヴェルノン駅までパリから特急電車で40分、駅からシャトルバスで15分程度とアクセスがよく、日帰りもできるので、ヨーロッパ各地や遠く日本からも数多くの観光客が訪ねていました。モネとのゆかりを全面に押し出した人口500人程のこじんまりとした町なのですが、私が訪ねた5月下旬は大いに賑わっていました。大人から子供まで、たくさんの人々にモネが親しまれていることを直に感じられました。

ジヴェルニーはセーヌ川のほとりにあり、すぐ近くに水の気配があります。なだらかな丘に囲まれ高い建物もないので、ひととき空が広く目に入り、日本よりも光の加減や移り変わりを強く感じられました。川沿いをランニングしたり、のんびりと散歩する人たちもいて、緑豊かなとても気持ちのいい環境でした。古くから河川交通が発達していた土地柄のため、ヴェルノンには、戦火を免れた教会や12世紀末の要塞、16世紀の水車小屋など、古い建造物が残っています。そんな歴史の香り漂う雰囲気に、もともとモネは魅力を感じたのかもしれません。



作品返却時の様子



モネの家の内部



再現された積みわら

モネの家やジヴェルニーの美術館を訪れて、印象に残ったのはどんなところですか？

ジヴェルニーの町はずれにあるモネの家は、広々とした庭と、鮮やかな色彩の部屋をいくつも持つ立派な建物でした。モネの没後は一時期荒れていたそうですが、現在は修復が進み、庭園も手入れが行き届いています。初夏の庭には美しい花々が咲き誇り、混雑していましたかゆったりと散策を楽しめました。室内はモネが暮らしていた当手を再現して、多数の複製画や浮世絵版画が所収しと壁にかけられていたのが印象的でした。モネが数多くの絵に囲まれて生活していた様子がうかがえました。

モネの家から歩いて5分少々、町の中心にあるジヴェルニー印象派美術館では、モネとジヴェルニーにスポットを当てた展覧会が開催され、当館の収蔵品も出品されました。ヨーロッパ各地やアメリカ、日本など世界各地から作品が里帰りを果たし、ジヴェルニーに移住する前の作品に始まり、時間の移ろいにモネが関心を抱き始めた頃、そしてジヴェルニーに拠点を移してからにいたるまで、30点弱の作品が一堂に集いました。晶屑目もありますが、当館の《積みわら》は多数の作品の中にあっても筆触のきめ細やかさや繊細な色彩が光っており、改めてその魅力を実感できました。

また、美術館の敷地内で、再現された実物の積みわらを目にすることができたのも面白い体験でした。高さは2m弱程度、ずっしりとした重厚な質感が鮮明に記憶に残りました。ジヴェルニーは豊かな自然が残る郊外の町で、モネが見た当時の景色も数多く残っているようです。《積みわら》に描かれたロケーションに近い丘も、当時の姿をありありと伝えています。今回のジヴェルニーへの旅は、モネのまなざしを追体験し、実際に作品が描かれた土地の空気感を知る実り多い滞在となりました。

篠原学芸員も、故郷で改めてその魅力を感じたという《ジヴェルニーの積みわら、夕日》は、MOMASコレクション2026.12.5-2027.2.28のモネの特集コーナーで展示します。このコーナーでは、モネの没後100年に寄せて、光の移ろいに焦点を当てた作品を広くご紹介する予定です。(G.R.)